

校友會誌

第三十六號

昭和二年三月

滋賀縣立彥根中學

校友會誌 [第三十六號] 目次

口 繪 (大正十五年度卒業生第三十九回)	詔 書	奉悼の辭	校 歌	聖上陛下の御崩御を承りて	◆論 說	待むべきは友のみ	かくあり	強きは人の意志なり	科 學	移民問題の一考察	刺戟の生活	◆感想	九月時事雜感	如是我言	夢さ人生	個人主義者はかく考ふ	近頃心に觸つたこと	◆創作	蜘蛛の糸
				西澤 新藏		須山 清太郎	居長 英三郎	大嶋 善太郎	坂本 至誠	宮川 卯衛門	大久保 眞順		宮川 卯衛門	居長 英三郎	林 俊雄	大久保 眞順	高 祖 保		大久保 眞順

◆散 文

晩秋の夜	四季	應援歌	こほろぎ	春霜	西郷小話	汽車にて	秋近い夕雨後の感じ	想夏二題	出雲から	晩秋初冬の景	昨夜の夢	晩秋	◆詩	旭日	時の流れ	朝露	秋路	岐一つ星	海四篇	部屋籠り
西澤新藏	永田次雄	松宮重次	麻生亀吉	高祖保	中川友三	漢見覺了	大橋啓	織田誠一	岡庭博	木村三雄	重森久雄	林弘英		西澤新藏	疋田芳夫	小林英太郎	井上登	須山清太郎	松宮重次	澤田勇次郎
													藻							
													詩林							
														</						

朝 小 銀 冬 筆
 小 座 夜 の
 さ な の 叢
 憧 象 集 讀
 憬 集 讀 讀
 坂 林 宮 高 吉
 本 俊 川 祖 川
 至 後 卯 保 文
 誠 雄 衛 門 一 郎

短歌

歌 留 多 果 て て
 秋 の 歌
 湖 南 に て
 侏 儒 の 聲
 暮 鐘
 山 吹 に 寄 ず る 一 首
 八 月 抄
 水 泡 の は な
 西 澤 新 藏
 大 森 元 太 郎
 井 上 登
 山 口 久 彌
 疋 田 芳 夫
 永 田 次 雄
 北 村 彌 一 郎
 澤 教 一
 高 祖 保

俳句

櫻 吟 永 田 次 雄
 雜 吟 大 森 元 太 郎
 春 吟 須 山 清 太 郎
 桐 一 葉 疋 田 芳 夫
 山 風 抄 居 長 英 三 郎
 雪 雲 豐 田 孝 之
 朝 寒 夜 寒 高 祖 保

冬 木 澤 效 一
 月 叢 漢 見 覺 了
 花 路 大 橋 啓
 比 叢 行 宮 川 卯 衛 門
 庭 下 駄 澤 田 勇 次 郎

紀行

第五學年旅行記

第四學年旅行記

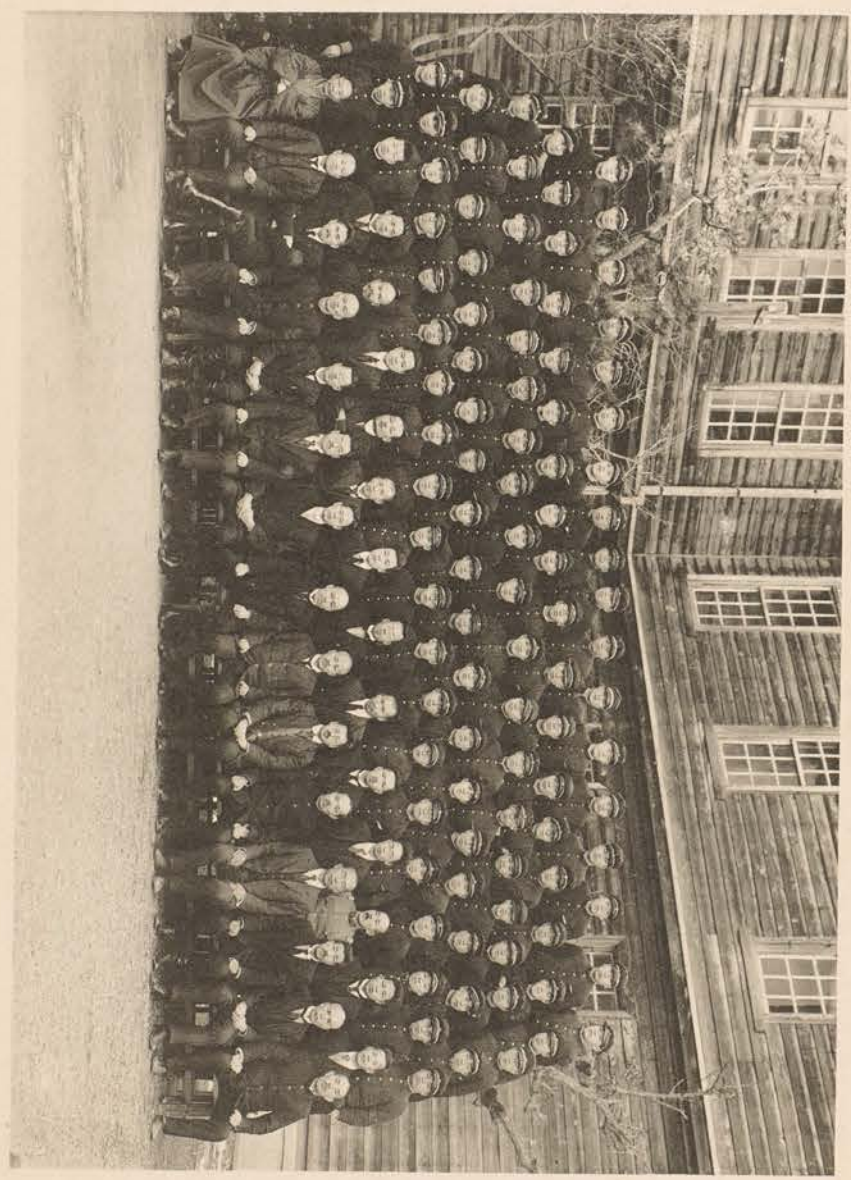
大和の四日

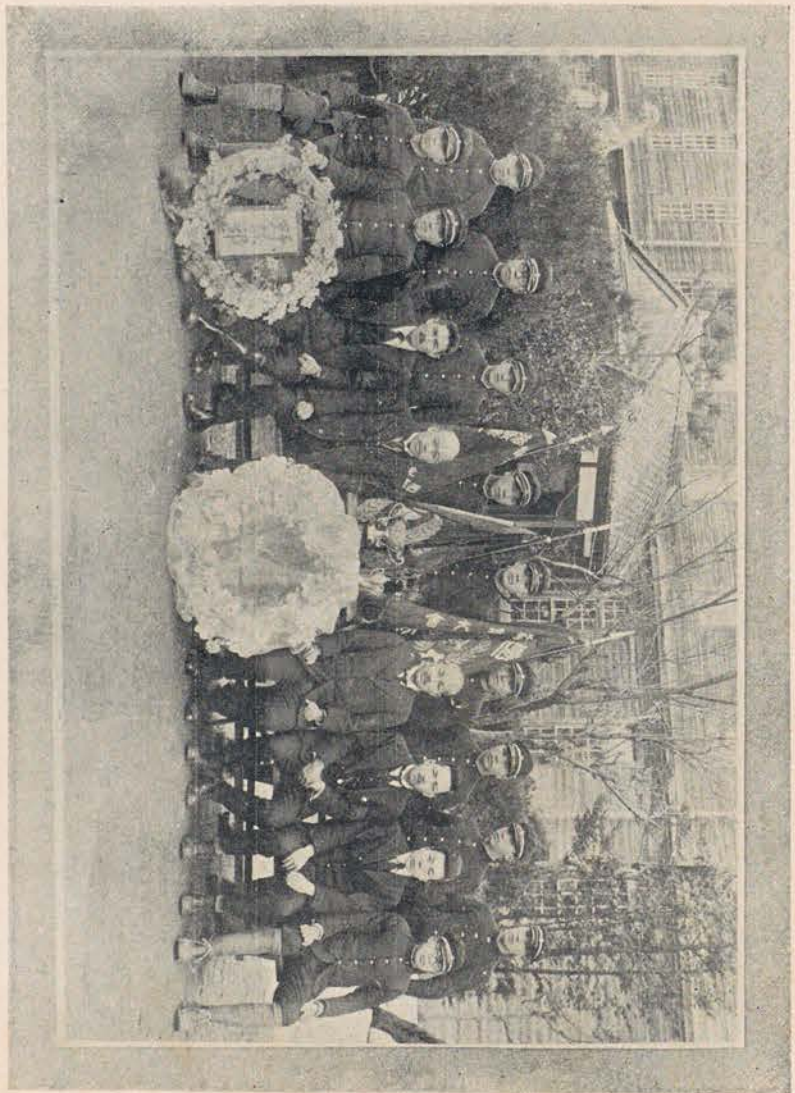
部報

學 藝 部
 武 道 部
 水 上 部
 野 球 部
 庭 球 部
 競 技 部

雜錄

學校日誌抄
 會計報告
 大正十五年度校友會各部役員一覽
 編輯餘錄





昭和元朝見式勅語

朕皇祖皇宗ノ威靈ニ賴リ萬世一系ノ皇位ヲ繼承シ帝國統治ノ大權ヲ總攬シ以テ
踐祚ノ式ヲ行ヘリ舊章ニ率由シ先德ヲ聿修シ祖宗ノ遺緒ヲ墜ス無カラシコトヲ
庶幾フ

惟フニ皇祖考叡聖文武ノ資ヲ以テ天業ヲ恢弘シ内文教ヲ敷キ外武功ヲ耀カシ千
載不磨ノ憲章ヲ頒チ萬邦無比ノ國體ヲ鞏クセリ皇考夙ニ心ヲ養正ニ宅キ廼チ志
ヲ繼明ニ尙クス不幸中道ニシテ聖體ノ不豫ナル朕儲貳ヲ以テ大政ヲ攝ス遽ニ登
遐ニ遭ヒテ哀痛極リ罔シ但皇位ハ一日モ之ヲ曠クスヘカラス萬機ハ一日モ之ヲ
廢スヘカラス哀ヲ銜ミ痛ヲ懷キ以テ大統ヲ嗣ケリ朕ノ寡薄ナル唯兢業トシテ負
荷ノ重キニ任ヘサランコトヲ之レ懼ル

輓近世態漸ク以テ推移シ思想ハ動モスレハ趣舍相異ナルアリ經濟ハ時ニ利害同

昭和
元和
朝見式勅語

朕皇祖皇宗ノ威靈ニ賴リ萬世一系ノ皇位ヲ繼承シ帝國統治ノ大權ヲ總攬シ以テ踐祚ノ式ヲ行ヘリ舊章ニ率由シ先德ヲ聿修シ祖宗ノ遺緒ヲ墜ス無カラシコトヲ庶幾フ

惟フニ皇祖考叡聖文武ノ資ヲ以テ天業ヲ恢弘シ内文教ヲ敷キ外武功ヲ耀カシ千載不磨ノ憲章ヲ頒チ萬邦無比ノ國體ヲ鞏クセリ皇考夙ニ心ヲ養正ニ宅キ廼チ志ヲ繼明ニ尙クス不幸中道ニシテ聖體ノ不豫ナル朕儲貳ヲ以テ大政ヲ攝ス遽ニ登遐ニ遭ヒテ哀痛極リ罔シ但皇位ハ一日モ之ヲ曠クスヘカラス萬機ハ一日モ之ヲ廢スヘカラス哀ヲ銜ミ痛ヲ懷キ以テ大統ヲ嗣ケリ朕ノ寡薄ナル唯兢業トシテ負荷ノ重キニ任ヘサランコトヲ之レ懼ル

輓近世態漸ク以テ推移シ思想ハ動モスレハ趣舍相異ナルアリ經濟ハ時ニ利害同

シカラサルアリ此レ宜ク眼ヲ國家ノ大局ニ著ケ舉國一體共存共榮ヲ之レ圖リ國
本ニ不拔ニ培ヒ民族ヲ無疆ニ蕃クシ以テ維新ノ宏謨ヲ顯揚センコトヲ懋ムヘシ
今ヤ世局ハ正ニ會通ノ運ニ際シ人文ハ恰モ更張ノ期ニ膺ル則チ我國ノ國是ハ日
ニ進ムニ在リ日ニ新ニスルニ在リ而シテ博ク中外ノ史ニ徵シ審ニ得失ノ迹ニ鑒
ミ進ムヤ其ノ序ニ循ヒ新ニスルヤ其ノ中ヲ執ル是レ深ク心ヲ用フヘキ所ナリ
夫レ浮華ヲ斥ケ質實ヲ尙ヒ模擬ヲ戒メ創造ヲ勗メ日進以テ會通ノ運ニ乘シ日新
以テ更張ノ期ヲ啓キ人心惟レ同シク民風惟レ和シ汎ク一視同仁ノ化ヲ宣ヘ永ク
四海同胞ノ誼ヲ敦クセンコト是レ朕力軫念最モ切ナル所ニシテ不顯ナル皇祖考
ノ遺訓ヲ明徴ニシ丕承ナル皇考ノ遺志ヲ繼述スル所以ノモノ實ニ此ニ存ス有司
其レ克ク朕力意ヲ體シ皇祖考暨ヒ皇考ニ效セシ所ヲ以テ朕力躬ヲ匡弼シ朕力事
ヲ獎順シ億兆臣民ト俱ニ天壤無窮ノ寶祚ヲ扶翼セヨ

奉 悼 辭

先帝陛下御登遐あらせらる。萬民天を仰ぎ、地に俯して悲痛慟哭するも今や空し。嗚呼哀
しい哉。嗚呼哀しい哉。謹みて惟みるに

陛下は叙聖文武、至仁至孝にましまし、夙に大統を承けて祖宗の鴻業を安懐したまひ、億
兆を撫して國運を八紘に伸べ給ふ。俗依りて以て文化に進み、民依りて以て泰平を謳ふ。

神德聖功、掛卷も畏き極みなり。殊に念ふ、我校は陛下未だ春宮にまませし明治四十三
年十月八日親しく行啓を忝し、越えて御即位の後大正六年十一月江濃の平野に於ける陸軍
特別大演習を統監あらせらるや、更に大本營たるの光榮を瞻へり。爾來幾星霜、御座所
は今尚ほ嚴たり、庭上の綠樹は今尚ほ後凋の節を致す。しかも一旦にして悲雲は低くたれ
て御座所を覆ひ、悲風は蕭々として綠樹を繞る。思はさりき、未だ聖恩の萬一だも報い奉
らざるにこの大喪に丁らんとは。嗚呼

震車返しがたく、龍髯攀つるに術なし。哀しい哉。哀しい哉。謹みて哀悼の忱を捧げ奉る

シカラサルアリ此レ宜ク眼ヲ國家ノ大局ニ著ケ舉國一體共存共榮ヲ之レ圖リ國
本ニ不拔ニ培ヒ民族ヲ無疆ニ蕃クシ以テ維新ノ宏謨ヲ顯揚センコトヲ懋ムヘシ
今ヤ世局ハ正ニ會通ノ運ニ際シ人文ハ恰モ更張ノ期ニ膺ル則チ我國ノ國是ハ日
ニ進ムニ在リ日ニ新ニスルニ在リ而シテ博ク中外ノ史ニ徴シ審ニ得失ノ迹ニ鑒
ミ進ムヤ其ノ序ニ循ヒ新ニスルヤ其ノ中ヲ執ル是レ深ク心ヲ用フヘキ所ナリ
夫レ浮華ヲ斥ケ質實ヲ尙ヒ模擬ヲ戒メ創造ヲ勗メ日進以テ會通ノ運ニ乘シ日新
以テ更張ノ期ヲ啓キ人心惟レ同シク民風惟レ和シ汎ク一視同仁ノ化ヲ宣ヘ永ク
四海同胞ノ誼ヲ敦クセンコト是レ朕力軫念最モ切ナル所ニシテ丕顯ナル皇祖考
ノ遺訓ヲ明徴ニシ丕承ナル皇考ノ遺志ヲ繼述スル所以ノモノ實ニ此ニ存ス有司
其レ克ク朕力意ヲ體シ皇祖考暨ヒ皇考ニ效セシ所ヲ以テ朕力躬チ匡弼シ朕力事
ヲ獎順シ億兆臣民ト俱ニ天壤無窮ノ寶祚ヲ扶翼セヨ

奉 悼 辭

先帝陛下御登遐あらせらる。萬民天を仰ぎ、地に俯して悲痛慟哭するも今や空し。嗚呼哀
しい哉。嗚呼哀しい哉。謹みて惟みるに

陛下は叡聖文武、至仁至孝にましまし、夙に大統を承けて祖宗の鴻業を宏恢したまひ、億
兆を撫して國運を八紘に伸べ給ふ。俗依りて以て文化に進み、民依りて以て泰平を謳ふ。

神德聖功、掛卷も畏き極みなり。殊に念ふ、我校は陛下未だ春宮にまませし明治四十三
年十月八日親しく行啓を忝し、越えて御即位の後大正六年十一月江濃の平野に於ける陸軍
特別大演習を統監あらせらるや、更に大本營たるの光榮を擔へり。爾來幾星霜、御座所
は今尙は嚴たり、庭上の綠樹は今尙は後凋の節を致す。しかも一旦にして悲雲は低くたれ
て御座所を覆ひ、悲風は蕭々として綠樹を繞る。思はさりき、未だ聖恩の萬一だも報い奉
らざるにこの大喪に丁らんとは。嗚呼

靈車返しがたく、龍髯攀づるに術なし。哀しい哉。哀しい哉。謹みて哀悼の忱を捧げ奉る

彦根中學校々歌

湖^{うみ}べの春^{はる}にかざられて
 雲^{うみ}ふきはらふ膽^い吹^ぶ山^{やま}
 ふもこの若^{わか}葉^はあたらしく
 われらが園^{その}はかがやけり
 緑^{みどり}しづけき學^{まな}びやに
 智^ち德^{とく}のとほそ啓^{ひら}きつゝ
 明^{あき}はなれゆく人^{ひと}の世^よの
 われらが窓^{まど}に光^{ひかり}あり
 不^ふ撓^{たふ}の決^{さだ}意^だと力^{りつ}行^{かう}の
 わかき生^{いのち}命^{めい}にまもられて
 幸^{さい}とほまれに美^{うら}はしく
 われらが園^{その}はかがやけり

剛^{がう}健^{けん}自^じ助^{じょ}の門^{かど}によりて
 湖^こ畔^{はん}のまもり嚴^{おご}かに
 たてる金^{こん}龜^きの學^{まな}びやの
 ああほまれある幾^{いく}春^{しゅん}秋^{しゅう}
 金^{こん}剛^{こう}不^ふ壊^{くわい}のこゝろもて
 つとめ勤^{いそ}しむ森^{もり}のかげ
 われらが窓^{まど}の燦^{さん}爛^{らん}と
 ああほまれある幾^{いく}春^{しゅん}秋^{しゅう}
 天^{てん}のかがやき地^ちに享^うけて
 こゝろ澄^すみたる琵琶^{びわ}の湖^{うみ}
 金^{こん}龜^きの春^{はる}とこしへに
 われらが園^{その}は新^{あら}たなり

彦根中學校校歌

1=96

～調四分ノ四拍子

5̣.5̣1.5̣ | 3 2 1 - | 5̣. 1 2 3. 1 | 5 - - 0 |

ウミベノ ハルニ カザラレー テ
みどりし づけき まなびやー に
フダフノ サダト リツカウー ノ
がうけん じょの きによりー て

6 6 5. 5 | 4 4 2 - | 5 3. 2 1 2 | 3 - - 5 |

クモフキ ハラフ イブー キヤ マ
ちさくの さぼそ ひらー きつ つ
ワカキイ ノチニ マモー ラレ テ
こはんの まもり おごー そか に

5̣.5̣3.7̣ | 1 2 5 - | 1 2 3 4. 3 | 2 - - 0 |

フモトノ ワカバ アタラシー ク
あけはな れゆく ひさのよー の
サチトホ マレニ ウルハシー ク
たてるこ んきの まなびやー の

5̣5̣3.5̣ | 6 6 5 - | 1 2 3. 2 | 1 - - 0 |

ワレラガ ソノハ カガヤケ リ
われらが まごに ひかりあ リ
ワレラガ ソノハ カガヤケ リ
ああほま れある いくしゅん 秋

聖上陛下の崩御を承けりて

西 澤 新 藏

積雪尺餘、降雪尙紛々たる師走の朝、淡き旭日正に東山を離れんとする頃、けたましき鈴の音は村の静けさを破れり。「號外」呼ぶ聲と共に投げ込まれし一片を見ればこはそも如何に。悲報至りぬ聖上崩す。あゝ、悲しい哉、此の報をもたらせろ。謹んで回顧し奉れば、陛下御踐祚遊ばされしより年を閲する是に十有五年。その期や誠に短かし。雖も、世界の趨勢日と共に進化し、國際の事益々繁し。かゝる國家多事の局に臨ませ給ひ強大なる列國の間に在りて、尙よく我が帝國をして今日あらしめ給へる、陛下の御心勞や拜察し奉るべし。然るに天か命か、陛下御惱いよいよ加はらせられ給ひ、御政務にも堪へ兼ねさせ給ふに至り、春宮殿下攝政にならせ給ひて五年はなりしなり。この間御養生につとめさす承りしかば再び御政務御親裁の日もあらんご心だのみに待ち参らせしに悲しい哉。何時の日よりか聖上御惱増し給ひぬご報じ初めてより、朝にもたらず新聞紙の待ち遠くして、今日は如何にわたらせ給ふかご御案じ申上げ、御氣色よろしご承はりては胸なでおろし、惱ませ給ふご聞きては胸ごぞろかせしこころに幾十日。津々浦々に至るまで、はや御平癒遊ばしませご、身の苦しみをも知らで御祈願申し参らせしに。又御孝心深き 東宮殿下並びに 妃殿下には、御身の御勞もいごはせ給はず、ひたすら聖上の御看護につとめさせ給ひ、七千萬の民草なべて神佛の御加護を祈り参らせしに。あゝ、聖上はや神去りましぬ。悲しい哉。鬱たる冬の日も哭するが如く翻たる弔族も哀歌に和す。あゝ、悲しいかな。

(十二月廿五日謹書)



論

説

恃むべきは友のみ

須山清太郎

人類は單獨に此の世を渡り得べきものではない。故に人は皆或は妻を或は友人を有するのである。妻なく友なき人は、恰も渺々として果てさへ知らぬ砂漠の眞只中を、唯一鞍のラクダの背を頼りに一人寂しい漂泊の旅を續けるキャラバンの如き人である。故に人は如何なる場合にも知己を要するのである。世事意の如くならざるこゝ、十に八九であるが、偕て儘にならぬこゝ云ふこゝは、或は一世が己を誤解し、或は己の力足らずして、爲さん欲する所を爲す能はざる、或は又我善良なる理想により、事を行へども世人之を誤解して愚人に爲すが如きである。かゝる場合に於て、心の不愉快は如何ばかりであらうか、殆んが測るべからざるものがある。この心持を悟るべき——同情を以て聞いて呉れる人がなかつたならば、人は永遠暗夜を行くが如きものであらう。幸にこの胸中の鬱屈を語り、この胸中の不平を語り得る友があつたならば之によつて自ら慰め得て、始めに幸福云ふこゝを感じるのである。かの基督教徒の祈禱は神を友として、己の胸中を語るこゝである。されば彼等は幸福であらう。併し縦し神を信ぜざるも、友人を得て以て不幸を語り、鬱屈を漏すこゝが出来たならば、是亦如何に幸福な事であらう。上帝は同胞兄弟を人に與へて居る。然るに其の同胞兄弟を友とする能はず、胸中の秘密を語るの友を其の間に求むるこゝが出来ず、唯上帝のみを友とする云ふのも、余は之を信する能はざるものである。故に余は信ず。幸福とは即ち友あるの謂であつて、不幸とは即ち友無きの謂である。友あればこそ不平にも、貧にも不幸にも處するこゝが出来る。若し友が無つたならば、如何に富貴を極め、如何に得意を極めようとも其心は常に寂寞として慰むこゝが出来ないであらう。

ゼー、ボータアが「幸福は人の之に與ふるものなくんば全からず」云つて居るのは之を指すのであるが余は言ふ。「幸福とは苦樂とも之を分つ友人あるの謂である」云。嗚呼友なるかな。友なるかな。

かくあり

居長英三郎

苦しみは人間生活の影である。又人間向上の源泉である。物體の在る所従つて影のあるが如く、人間生活の在る所必ずや苦しみがある。人は苦しみに生き、苦しみに死ぬ。來ん者を憂へ去りし者を悲しむ。行はんとして悩み、達せんとして悶む。而も苦しんで始めて生き、悩んで始めて行ひ、悶んで始めて達する。神ならば知らず、佛ならば知らず、苟も人間であり凡夫であり、肉體を有し精神を有し、そして慾望を有する以上、苦しみは常に人間生活の背景であり。人間向上の起點である。世の所謂享樂主義者或は樂觀主義者の生活の如きは、一見只樂しみそのものであり、苦しみを超越した極樂淨土の如きである。併し乍ら、更に彼等の生活を深省し、觀察するこゝ、吾人は亦彼等の生活にも生きんとするもの、悩み、現實の苦しみを發見するであらう。

若し吾人にして、一度繪畫展覽會を見んか。多くの田園の美は華かに眼前に展開されるであらう。或は霧の晴れ行く爽かな朝の景色、或は豊かに熟れた秋の田の黄金色の夕日、そして幸福に充ちた農夫の姿。又詩集を繙かんか。詩人は隨所に田園生活の平和と、農村生活の幸福とを嘆稱せるを見るであらう。けれど吾人が眼を現今農村生活の實際に轉するこゝ、あまりにも淺ましい農民の苦惱と、農村生活の悲哀とを見せつけらるゝではないか。

彼等の大部分の有する、冷飯に凍えた心は、もうあの美しい夕日を拜む餘裕も失つてゐる。迫り来る壓迫と貧困との爲に、齟齬として無自覺な勞働を續けねばならない。封建制度の許にあつては、事實に於て社會の最下層に壓迫せられた彼等は、今

日尙最も低い生活程度に甘んずべく餘儀無くされてゐるではないか。是に於て誰かかの畫人描く所を、農村の實際を照して矛盾の感無きを得るであらう。然らば畫人の描く所、詩人の歌ふ所は偽であらうか。私は只一言「否」を答へる。畫人描き、詩人の歌ふ所は必ずしも偽ではない。但、彼等の描き、彼等の歌ふ所は田園生活の美の一面に止る。田園生活は美の一面のみではない。勿論苦しみ的一面のみでも無い。あらゆる世相を、あらゆる面によつて構成せられ包まれたる複雑な立體である。かゝる立體的な社會を論ずるに、只一面の觀察、殊に全く相反せる一面よりなせる理論を以てするときは、其處に矛盾の生ずることは當然であると言はねばならない。

愚なる女の希ふ生活は、花柳社會の生活であり、又カフエーの女給であるを聞く。輕薄な青年は徒にかの米國の自由を謳歌し憧憬するではないか。而も一度彼等をしてその望む境地に到らしめんか。彼等は忽にして生活苦に呻吟し、望の適はざるに泣くであらう。實にこの理由こそ彼等が余りに皮相な一面の觀察に捕はれし點に在りさせなければならぬ。

去りし日、社會運動に關して京大學生を中心として、俄に行はれた學生檢査事件を何ぞか見る。私は云ふ、彼等大學生は社會を見るに余りに盲であつた。こゝ、假令彼等の言ふ所正なりとするも、或はその行はんとする所善なりとするも、彼等の理論は只社會一面の觀察より生じたに過ぎなかつた。彼等が事實の一部分たる理窟を事實と同視し、平面的な理論を以て立體的な社會を律し去らうとしたことが、抑々の謬りであつた。

最後に繰返す。「社會は立體なり」を。立體は一つの面のみによつて成れるものではない。又立體の形狀は常に千種萬様である。吾人は概念的な思想、平面的な理論のみを以てして、社會を律することは不可能である。博い常識、自由な思想、深い經驗によつてするときは、始めて社會に生き、發展し、向上する可能性を認め得るのである。一五・一一・二七 彦根商業にて

強きは人の意志なり

大 嶋 善 太 郎

強きは人の意思のみ。

彼の大震災火災に遭遇せる帝都を見よ。自然は我等人類に不可抗力の災禍を下したのである。幾萬の同胞は廢墟の下に倒れた。幾億の財寶は一爐の灰と化した。されど依然として滅びないのは人の意志である。滅びないのは人類の意志の生める美術である。人類の生める詩歌の殿堂である。

けに滅びざるは人類の意志である。自然の力は偉大であり又絶對である。併し此の偉大な自然、絶對な自然の力も只強き人類の意志には如何ともなす能はざるものであらう。

復興せんとする人類の強き意志は何ものも之を阻むことは出来ない。火焰の中に無慘に斃れてもその人の健氣なる意氣は滅びはしない、決して滅びない。地は裂け家は焼けても決して滅びない。それは人類の意志である。人の意思によつて成し遂げられたるもの程力強く大なるものはなからう。

人の強き意志によつてなされたるものそのものは人の意志の強きと同様に極めて強いのである。宗教を見よ、藝術を見よ、美術を見よ眞の意志よりなれるもの總ては偉大である。我等はこの強き意志をもたねばならぬ。否否持つてゐる筈である。

人のなせる事業成績より人の意志を除くならば後に残るは何か、何もなからう。我等人類のなせること總ては意志によつてなされたのである。

私はこの人類の意志を讚美する。この意思こそ眞の美であり、眞の力である。偉大なるはこの人の意志よ。強きは人の意思よ。

科 學

坂 本 至 誠

科學！科學！科學なるものは全宇宙のあらゆる事物、すべての現象を説明しようと思つてゐる。而かもその著しい進歩を發

達の歴史は既に全宇宙を支配しようといふ試みにさへもその矛先を向けかけて居るのである。殆んど絶對的な猛威をもつて進んで行く科學の勢は現代人にまつては誠に怖ろしい位である。科學の進歩、殊に機械文明の發達によつて著しく前世紀の限界せられたる現代が所謂物質文明なる過渡時代に遭遇しつゝあるのも誠に已むを得ぬ成行きであると言はねばならぬ。

コペルニクスが地動説を主張した時代には、當時の主權者ローマ法皇に對して「私の申します地動説は此は單なる一つの假説に過ぎませぬ」と誓言する事に依つて辛くもその全世界を支配すべき論説を發表することが出来たと言ふ時代の一つの喜劇がついに近世の出来事であつたのに、現在では既に三才の童兒もそれを辨へて居る。然かも案外に數理的には的確な概念を持つて居ない。私共人間が地球の自轉公轉に依て毎秒數十哩の速さで宇宙をかけ廻つてゐるのであるといふ事實は、コペルニクスの云つたところの「地球は廻る」の一言にして既に説明せられて居るのである。私共はよく病氣の時などに「絶對安靜」を保たねばならぬ事がある。「生命あつての物種」をばかり後生大事にベッドにしがみついて養生してゐるが豈計らんや、所謂絶對安靜を保つてゐる筈の人間は一秒間に數十哩といふおそろしい速度で宇宙を走つてゐるのである。

ニュートンは地球の引力を發見した「林檎が地に落ちた」といふつまらない日常の茶飯事を基礎として地球の引力を發見し更に萬有引力説にまで到達したのである。この引力の發見否引力の説明によつて、され程科學の世界が急激な進歩をしたかは實に筆舌の盡し得る所ではない。乃ち吾々の世界はすべて引力に依つて支配されてゐる——云つても差支へはない。然らばそれ程大事な引力を何故にもつと早く見出せなかつたか？何故もつと早く説明出来なかつたか？疑問が起る。

それに就いては單に「昔の人は疑はなかつた」の一言で盡さる。「何故に……」といふ言葉は精神上の事にのみ用ひられて唯物的には決して用ひられてゐなかつたといふのがその最大原因である。昔も今も自然の現象には少しも變りはない。如何に科學が發達してゐなかつたかは云へ古來「河の水は低い所から高い所へ向つて流れる」と云つた人は一人も無い事實は古今東西を通じて依然として事實である。然るに事實を單に事實として受け入れてしまつて、敢て「何故に低い方に向つて流れるか？」と疑を起さなかつた所に既に科學の世界は停滯して居つたのである。「河の水が逆に流るゝ」とも決してこの暫は……等と云つて誓約にさへも用ひられてゐた事を思へば、如何に古人が絶對的に事實を單なる事實として受け入れて居つたかを雄辯

に物語つてゐる。そこには微塵の疑もなかつたのである。疑ふ事に依つて吾々は地球の廻轉してゐる事を知り、引力に依つて地球上に在る事を知つたのである。

さて科學の發達の歴史に著しく力を添へたものは前に述べた所の地動説と引力説の二つを以つて、その最たるものとし又一面ワットに依つて發見せられた蒸氣汽機によつて目勇ましく物質的な進歩が促進せられた。汽車が出来汽船が動き人力が次第に機械に依つて侵略されて来るにつれて色々な社會問題も生じて來たわけである。

近世科學の最も顯著なる產物は何かといへばそれは電氣である。電氣の應用は今やありとあらゆる方面にまでもその範圍を擴張しつゝある。フランクリンが「風をあけた」といふ路傍の一些事が既に斯くの如き大なる結果にまで導かれて來たのである。現代に於ては電氣と云ひ、電話と云ひ、電燈と云ひ誠に我々は電氣のお蔭を蒙る事頗る大である。而も電氣の正體たるや誠に不可思議至極なものであつて、さうしてもその正體をつかみ得ない。従つて一般の人々には理解されて居らぬのも無理からぬ事である。先づ第一に目に見えぬから解りにくい。發電所等其の他の電力を用ひてゐる所でよく「危險」と云ふ貼札のあるのを見受ける。何にも危險さうな様子が無いのにたゞ貼札が危險と示してゐるのは一寸滑稽なものである。従つて物好きなものは一寸位觸つて見たくなるのが當然である。が併しうっかり觸つて見ようものならそれこそ大變アツと言ふ間もなく十萬億土も一飛び極樂往生疑ひなしだ。でも相當の方法さへ講じて置けば不思議にも觸らうが突かうが引張らうが何でもない。これが電氣の特徴であり、と同時に不可解なる理由であり、又一面電氣の最も優れた點でもあり得るわけである。然かもこの解らぬ電氣が數學的には他のどんな科學よりも一番よく一致し、説明出来るといふに至つては、何んだか眉唾もの、様な氣もする。

茲に於いて電話の發達史と云つた様な事柄を一寸——電話が世界で一番最初に發明せられたのは一八五五年アレキサンダー・グラハム・ベルと言ふ人に依つてゐる。而し實際に用ひられたのが一八七六年ボストンとケムブリッジ間二哩の電話に成功したのが最初、即ち僅かに六十年以前の事なのである。その後著々としてその進歩を遂げた結果現在の隆盛に達し更に又無線電話の實用にまで發達したのであるが一方我が國に於ける電話の發達を顧みれば、抑々我國に電話なるものが輸入せられ

たのは明治十年遷信省宮内省の間、十九町三十二間に電線二條を敷設して通話したのが開闢以來初めてあると聞く。

移民問題の一考察

宮 川 卯 衛 門

人口が増加し加ふるに食糧が缺乏して、國土内に於ける居住が不可能となれば畢竟其國民は何れか國外に居住の地を求めねばならない。是に於て移民と云ふ事が始めて實現されるのである。

日本も明治中年頃より漸く殖民を始め、滿洲、北米合衆國及び其他の地方に多數の移民を送つて人口對食糧の調節を計つて來たが、近時各地に日本移民排斥の聲を聴き加ふるに新記録に次ぐ新記録の人口増加が現出するに至つて當局者も餘程苦慮してゐる者と信する。

我國に於て移民問題が多數有識者間に喧しく論議せらるゝに當り、吾々學生間に於ても移民問題に直面した今日、少くとも移民に就いて或程度の覺悟を有せねばなるまい。

一体我國は年々幾何の人口が増加して行くのか？それに就いて内閣統計局が這般發表した大正十四年度に於ける本邦人口の自然増加を調べてみるに、優に「八十七萬五千三百八十五人」と云ふ大數字を示してゐる。是に於て必然執り得べき適切な對策は「殖民」と云ふ事あるのみ。

人口問題の對策として輒近一部有識階級——特に女性間に喧傳されてゐる産兒制限論は或は一方法かも知れぬが、人口増加が大勢である以上なかなか見込みが無いし、制限したとて「増加」其者には何等變りは無いから結局マルサスの道德的抑制論も我國に於ては何等其効を奏せない。

日本の爲政家が殖民即ち移民問題に深く注意を拂つてゐる事は彼等の宣言に依つて其一斑が窺はれる。即ち「殖民政策ノ確立ヲ期ス」と云ふ事實だ。

「確立ヲ期ス」と云ふ文字がある以上、我國從來の殖民政策には確實性を缺いた點があるに相違ない。然り從來日本の殖民政策はいづれも消極主義であつたのだ。それには種々複雑した理由もあらうが一般國民が物質文明を偏重して我國民の傳承せる進取精神なる美點が薄らいだのにも大いに因由してゐる。

前年北米合衆國が日本移民に制限を加へて所謂重大なる結果を生んだがこれも此の消極的主義に基づいてゐるのだ。移民問題は最早、吾々自身の實際問題と化してゐる。吾等即ち將來國家を双肩に擔ふべき青年は政治家の手を煩はして殖民問題に處すべきではない。吾々が氣勢に鑑みて自覺し進取的氣象の充溢を計つたならば政治家は充分に積極的殖民政策を確立し得るのだ。雄飛すべき地を海外に求むれば蒙古、ブラジル、小アジア、南洋等が我が移民を歡迎してゐる。新生面樹立の時は今だ政治家に依つて確立された大殖民政策は進取的氣象旺盛なる吾々の手に依つて始めて實現され得るのだ。

刺戟の生活

大 久 保 眞 順

「現代の重なる罪惡の一つは急ぐと言ふ事だ」(One of the chief sins of our time is hurry)

現代の社會現象は、殆ど「急ぐ」と言ふことで解釋される。「急ぐ」と言ふ事が現代人を極端に、不安、懷疑、焦燥、煩悶に陥らしめ、其の結果「剃刀の刃よりも鋭い」神經の所有者たらしめたのである。物質文明は諸種の方面に涉つて精緻な機械器具を生産した。けれども其の目的が只管「早くする」と言ふ事のみに始終してゐて、人類の福祉と言ふ點には直接交渉をもたないかの如く思はせる。「急ぐ」と言ふ洗禮を受けた現代人は、遂に「驚き」と「怖れ」を失つてしまつた。そして完全に、一臺の「ホモ・サピエンス」(人間)と言ふ機械に化して了つた。

斯様にして「櫻かざして今日も暮しつ」と言つた様な生活は全く地を拂つてしまつた。四圍の物事は悉く大きな速力で進んで行く。自分も冒袋が有る限りウカウカして居られない。匆忙繁劇な生活は現代の何人も避け難いものとなつた。そして悉く

の人々が水車屋の「粉挽き春」の様に一緒にグルグル廻つてゐる。けれども人間の體力、能力には際限がある。粉末が春から飛散る如く、生存競争場裡から逃れようとする。疲勞と言ふ一種の精神病を忘れようとする。そこに「刺戟の生活」が始まる。疲勞、倦怠を忘れるには自然な方法では満足できない、ものたりないから勢ひ不自然な、人工的な方法で心身を興奮させる最も大きな刺戟は何と言つても性慾、食慾であらう。之に較ぶれば音楽觀劇より受ける刺戟の小さい事は問題ではない。或人は教養なき者と呼ばう。けれどもか様な場合、教養は何等の偉大力も現さない。

食慾の刺戟について言へば随分多數の刺戟劑がある。酒、煙草、鴉片、ウイスキー、ブランデー、hashish、absinthe……數ふるに堪わない。

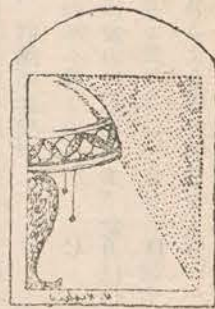
性慾の刺戟は本誌の性質上書くことを止める。

毎日々々新聞紙は何を齎らすか。疲れた社會の悲しい報告である。其の悲しい報告さへも、人は「醜聞を愛する。なぜならば、他人が餘りに自分の心を代表するから」言ふ様に刺戟を得て、或種の享樂をするのである。そしてこの醜聞を或る愉快を以て貪り讀むと言へはれてゐる。

一步室外に出るならば、五感に悉く異常な刺戟に脅かされる。カフェーの女給は蛇の様な手で以て觸覺を刺戟し、活動寫眞館の看板はあの艶冶な媚體と毒々しい迄に彩られた色彩で視覺を眩はすに遺憾なく、奥に聞ゆるオーケストラは聽覺を惑はすに餘念ない有様。刺戟は或程度迄感覺を敏感にさせるであらうけれども、遂に病的——不具にならざるを得ない。私は或女學生から、泣く事は最も多く快感を惹起せしめるものだと言ふ事を聞いた。此れの如きが其の類ではあるまいか。

靜かに現代世相の一斑を考へる時、そこには戰慄すべきものがある。そして奈何に多くの人々が刺戟の慾求に汲々乎たるかを思ふとき、人間を買ひかぶり過ぎた私は現實曝露の悲哀に似た或哀愁に捕はれるのである。

私は現代人の生活を「刺戟の生活」と呼んでゐる。それは各時代を通じて、現代人程多く感覺の存在を鮮かにマザマザ知つた人々は殆ど居なかつたらうから。現代人の慾求する刺戟が彼等の生活に餘りに大きな領分を有つてゐることに一驚してヨクヨク大きな晴をみはつて此の一文を感想した迄である。私は此の生活を禮讃も批難もしない。 一五・九・二四



感想

九月時事雜感

宮 川 卯 衛 門

一日の震災記念日に盆踊りをやつて滅法はしゃいだ處がある。知識階級が與つてゐた云ふから人間が一時的享樂の爲理性を無視する事もこれまで來ればだいぶん徹底してゐる。

海一つ向ふの支那は今、戰爭の眞最中。支那の戰爭は年中行事だ云ふ人もあるが、支那はいつも天候不良だ考へてゐるご間違ひがない。雲行きが少々險惡になるご時ならぬ彈丸の雨が降つて長江や黄河に洪水が起る。そして時々其の餘波が日本や遠くは英吉利まで及ぶのだ。

蔣介石の學生軍は秩序整然なかな強い云ふ事だが、日本の青年だつて支那へ渡つて戰爭をやるならそれこそ向ふ處敵無しだ。まして軍事訓練を受けつゝある吾々學生に於てをやだ。

「バレンチノが死んだ。松之助が逝つた」云ふ訃報が學生社會は勿論の事、一般民衆の耳に入るだけでも映畫云ふもの

夢の神祕を論じて見よう。

古來文人は靈妙な筆に托して一瞬間の間に流れ来り流れ去る人生の淋しさを感傷的な詩情から夢にたこへたが文雅の心なき私等もしみつゝ様な底冷のする寂しい冬の夕靜かに雨戸を叩いて道ひ過ぐる木枯の行方を凝視めつゝ獨り人類の過去の歴史を回顧する時更に此の感を深くするだらう。埃及は稷欄の葉末に消え行く雲の濃きナイルの岸に文化の花を匂はせローマは奴隸歌ふ七つ丘邊に榮華の美酒を傾けケーザルは生れて死し豊公の偉業も鐵木眞の建設も亦空しき廢墟に知るのみである。神は吾等に永遠を思ふ念をさづけられた。それに較べて彼等の覇圖も榮華も唯長夜の夢の果敢なきこ何等異なる所がない。

本來夢は現實はその本質に於て全く同一視するべきものではあるまいか。人々は夢は現實に較べて影が淡いこ稱するけれどもそれは覺めての後の感想であらう。時は昔エルサレムの町に幾多の順禮の群で清い讚美歌のリズムが緩かに流れて居た頃、橄欖山の麓のこある聖廟の門前に集食つて居た一人の乞食の子がゐた。灼れる様な太陽が一日の動ける世界を凝視めてゐる間彼は民家の軒端に人々の惠の露に濕ひながら慘な生活を續けてゐたが、暗み行く空に白銀の月が浮いて水の如き光の波がイエルサレムの町を包む時彼も夕の祈を終へて一日の感謝と疲勞の爲め平安な魂を抱いて横はるや常に美しい夢の王國に生れて居た。こある國の皇子として華かな誇り歡喜に溢れ自銀の小矢に黄金の弓をたづさへて野葡萄の濃紫に實れる野邊を葉蔭に憩ふ小鳥を探ねて走り廻つた。かうして彼は王子としての生活と乞食としての生活を正しく毎日續けたこかいふ。然るこきは此の少年は何れが夢で、何れが現實であるかを覺る事は困難である。かく夢も統一されるこ確かな現實といつてもよからう前後の關係が比較的明瞭なのが現實である。比較的不明瞭なのが夢であるこ考ふるならば吾々の人生も定義に隨つて純然たる夢である。

吾々の生れなかつた以前は何處に連絡するだらうか然して死して後何處を彷徨すべきかこ言ふ問題は吾々が現在有する智識では一步こいへこも踏み込めない久遠の謎である。吾等の人生は虚空から浮み出した夢であるこ言つて誰が否定し得る事か出来よう。

今一人の超現代人が一步吾々の人生を踏出して一切の形式も束縛もない透明な虚空から吾々の人生を俯瞰する時、夢も現實

も共に一切空の大海に注ぐ二大河流である事をまぎれこ見るだらう。

個人主義者はかく考へる

大久保 眞 順

◇人間の腦には未發達の細胞層がある。こ或刀圭家は言ふ。しかも其が腦の三分の一以上を占領してゐるこは赤ん坊の頭から、カント、ゲーテの成熟した頭に至るまで同じこである相だ。其の未發達の細胞層が進化論の法則によつて、幾万年かの後に完全に發達するさうだ。そんな時代には、現代の文明の利器は遂に小兒の玩具たらざるを得ないだらう。一五、二七

◇今年小學校に入學するらしい少女が赤い靴をさけて隣の人に見せてゐるのを見た。一種の誇り喜悅に輝く其の瞳。其の喜悅は人間が眞理を探求せんこする時に起るそれではあるまい。只赤い靴を下けて登校する！其の喜悅だ。私は過去を顧みて微笑を禁じ得なかつた。人は一日毎に殺風景になる。 — 三、二一 —

◇田舎に行くこ相當其の村で舊家こ言はれてゐる家には多く欄間に武器——槍、長刀、鳶口——を掛けておく風習がある。自分はそれを見る度毎に不快を抱く。舊家を誇る際には斯様な殺伐な風習が傳統的に残存してゐるのだ。斯様な事實が冥々裡に、奈何に多く子弟の教育に悪影響を及ぼすこか。又實際的に險呑だ。臺灣の生蕃の「首祭」ここに選ぶ所があるか。

— 三、二五 —

◇吾々は過去の記憶——それがよい結果でなかつた場合——を追懷するのは一つの苦痛だ。招魂社に今日集つた人々はこんな實感はあるだらう。親しい者、近しい者こ別れた當時の苦痛を再び追懷して苦しませようこ言ふのがあの招魂祭だ。五、六

◇人間の顔程奇妙な物はないこツク／＼考へた。一寸見て居れば何の不思議もない。けれども三分、五分こ長く見つめてゐる

こ實に奇妙な感じを與へる。それは其の人の個性をシムボライズしたら必ずあんな顔になるこ言ふ感じである。

感想

所感をよせてゐる。或人は日本の家族制度を云々し、又ある人は愛を高唱してゐるやうだつた。そして齊しく加害婦人に相當の同情を示してゐた。併し自分はさう考へない。「弱い」事の代表とされてゐる婦人の一面には斯様な殘虐性は必然的に備へてゐるものゝ、あの美しい容姿に接する毎に直觀的にさう思ふ。殘虐なる者よ、汝の名は女なり。——五、一九——

◆今日は自分の所の茶摘みで、三人の女が手傳ひに來た。自分も半時間程手傳つた。彼等は可成りよくしゃべり、他人の批評に對しては、凡ゆる多くの資料を持つてゐる。之は不撓不屈の資料蒐集と言ふ點に於て敬意を拂はざるを得ない程度のものであつた。談一度性的方面に入るや彼等は之に對してもなか／＼雄辯であつた。魅惑的な、官能刺戟的な言葉を自由に驅使して別に羞恥の様にも見えない。可成り長くの性的生活を續けて來た人々には何ともないらしい。彼等は何等かの意味に於て徹底してゐる。——五、二三——

◆月の皎々を輝いてゐる夜、自分は深く月を眺めてゐる。必ず野蠻人の生活が胸に詩的な、感傷的な幻影となつて浮んで來るのを覺ゆる。あの輝く月の下で彼等は今日得た獲物を真ん中において、老若男女の一族が甘い歡樂に耽つてゐるのではあるまいか。月の舞踏をやつてはゐるまいか。由來自分は野蠻人の生活に深い愛着を持つてゐる。——その實私は彼等の生活を知らないが。——六、一八——

◆「近頃はほんこによく雷さんが落ちるが雲が薄くなつたのでなからうか」六十を越した自分の所の洗濯婆さんが言つた。

「いや、雲が薄くなつても雷は氣をつけてゐる。人間の親切が薄くなつたのだ。つまり人間が段々薄情になるからだらう」私は答へた。其の女は卓論でも思つたか、妙に感服してゐる。併し私は彼女の科學的無智を笑ふ譯にはゆかなかつた。

◆森林を考へる。私はきまつて古代生活を聯想する。古代生活と森林とは全く水と魚との關係をもつてゐる。個體發成史は系統發成史を繰りかへすと言ふのが生物學上の一つの法則ださうだ。この意味に於て私はかく聯想するのではあるまいか。——八、五——

◆「糞を立つ田の中に働く百姓、百八十度を下らない汽罐車に働く火夫、彼等は感謝の生活をしてゐるばこそ、生の喜びを享受してゐるばこそ斯様な生活が出来るのです。實に尊ぶべき生活でないですか」お、あなたは詩人の言葉が上手ですね。

彼等にそんな自覺がありませうか。若し自覺ありしすれば、地主に對する反抗、キャピタリストに對する暴慢それです。彼等には經濟的壓迫があります。もつと端的に言ふならば、人間に胃袋のある悲哀です。彼等こそ此の悲哀のみ知つてゐるのではないですか。——八、二〇——

◆今私の前には多くの山々が朝日を受けて映えてゐる。その中でも比良、比叡、近江富士は特に聳立してゐる。私の心には自然の偉大さに對する無量の感慨が起つて來た。あの山々のドツシリした崇高さは哲學者の面影を髣髴せしめるものがある。あの靜かさは全く哲學的な靜かさだ。ふ、私は、幾百幾千年の無智な時代から今日迄山が或宗教的な氛圍氣に包まれてゐる事を思ひ出した。そして、それ等の時代の人々が山や大川等の自然物を信仰の對照としたのも解る様な氣がする。

一九、一一——

《第十五年度の日誌から》

近頃心に觸つたこと

高 祖 保

（生意氣な高慢ちきな小感です。一寸あいさつまで）

剽窃は卑劣である。だが模倣は結構である。その所以は剽窃は結局どこまで煮つめたにしろ他人のものであり、模倣はつまるところ自己のものである。他人の作品に自分の名を書いて、それが自分のものになれば、それは實際結構此上なしである。併しさうするは自他混同して全く誰のものだか、見分けが附かなくなつて了ふだらう。しかのみならず、爲にならぬのである。力が附かないからだ。應用が利かぬからだ。自己が死ぬからである。さすれば一寸の苦勞を惜むより、矢張り着實に歩み一步一步實力を附けた方が徳になる。徳になればそれに着いたほうがよい。よく雑誌でも、否もつと手近にして云へば此の校友會誌々上にも、折々他人の作品に自分の名を書き、しかも平氣で活字に組んで貰つてゐるから不思議である。寧ろ滑稽

云つた方が、より適當であるかも知れぬ。かうなるこそその人の心理状態、人格そのものが丸出した。「活字になつた他人の作品なる自分の作品をびくびくもんで見て、彼奴うまく書くな云はれたら自分の良心は泣くのだ」他人は知らないでも自分が自分の悪事を知つてゐる、そして悩み苦しむ、これ程辛いことは又もあるまい。こんなことは止めたが優しである。

一方それなら模倣は如何であるか。まことに結構である。模倣なくして自己の思想なり、主張なり、感想なりを表だつて知らさうことは不可能である。所以は他でもない。凡ての物は皆、否文章詩歌其他種々文藝的作品に銘打たるものさへ、結局前時代からのその模倣云はねばならぬ。文章の種々ある型がその時代に全く前例なき背景に於て發生したものなら、それは如何にも模倣ならざる創作だ。創作云つて決して悪くはなからう。併し残念乍ら「みそ一文字」も前時代からの譲りものだ。哉、堯の俳句も亦然りである。されば大きい意味での模倣は恐ろしく凡てのものを抱擁する力がある。この力ある下に一定の譲りものを、唯型が少々新しいの、變つてゐるので、全然創作に銘打つても確なる意義に立脚した創作ぢやない。ないのみかそれもやがて一べんの模倣云いつて然るべしである。

「模倣を離れぬ」云ふ言葉はよく通用してゐるが、この限定的な意味に於ける見方からして申せば、これ又頗る恐ろしい偏見、否偏言である。かうなるこそ創作なんてものは、からし駄目である。新しいの變つてゐるの云つて模倣は模倣であつて創作ではない。模倣こそ創作をこつたにして、やれこいつは創作だ、小説だ云つたつて何になるか。何にもならないことさつて前述の如しである。

模倣を斯くけなすもの、自分も時に剽窃と薄紙一枚程の冒險的な模倣をやる。しかも模倣はそれでいゝとして、生み出された作品を自分で読んで見て、誰に氣兼ねも要らねば心配も要らず、得々として讀み得、又「自分のもの」云つた氣持に耽れたなら、それこそものゝ上手下手を遙に超越しての喜悅をそこに味ひ得る云ふものだ。私はこれを經驗から如何にも、この言に證明を附して誰もの前へ提出することが出来る。愉快、お、何たる愉快だ。喜悅、お、何たる喜悅だ。模倣はいゝ。しかし自分のものとして生きた模倣でありたい。剽窃それは如何に卑劣であるか、もう私はこゝにして云ふ力はない。書く筆がない。ペッ。併し墨を新にして私は云ふ。剽窃は卑劣だ。しかし模倣は結構である。

「自分のもの」云ふ言葉が用ひられる。近代思潮の傾向なる如に載せられた言葉である。この言葉は上向きは至極やさしく、内面には全く鋭い主觀のかゝみを持參して、流れて歩く語である。この語、大事にしていゝ語である。

「自分のもの」は他人のものでなく、自分の所有の名の下に有るものゝ事である——こゝは云ふまでも無からう。併しこれを物質と見て貰ひ度くない。私は文字の上での「自分のもの」を申したいのである。

一体、文章云つても各自の個性は必ずあるものである。(くせではない)この個性なきもの、而して力なきもの、新味なきもの、意味なきものを稱して世に死文と申し上げるのである。

死文でなく光つてゐるのが所謂「自分のもの」を如實にした作品である。勿論この意味での「自分のもの」は模倣や剽窃なんかを遠く超越してのこゝだ。剽窃模倣なきに拘泥せず、よく他人のものを噛みこなしてから、新に自分のものとして吐き出す、それが文章の型をなした曉は屹度、光つたものが出来る。個性あるからだ。死文でなく生きてゐるからだ。それは譯有つての事である。

何故か。こうだ。他人さまの自分のもの、又如上の通りを續けて一文をなしたこゝに想像し給へ。そのつきふの貧しい思想なし主張なしの一文はまんま死んだのだ。生れずして死んだのだ。生命、即ち文章としての生なく、自分のものでなかつた爲死んだのだ。だから往々剽窃者なきに限つて死文を麗々提出して拙者のものに候こそりくり返つて居る。こりや何たる悲惨だらう。よき一幅のカリカチュアである。宜しく笑つてやるべしだ。斯くして死文なるものこそ「自分のもの」の意味上の文章の懸隔は、その甚だしきものを持つのである。その例はあへてこゝに記さないが、食物なきの上に於けるこの實例は多々ある。幸ひにしてこの言を諒せられる人が在つたなら、それこそ私は幸福である。

私は「自分のもの」云ふ語が大好きだ。そして亦、私さしてもひひしく「自分のもの」なる思潮に正しく立脚して、まことに噛みこなされた文、光つた文、個性ある文、即ち生命ある文章を書きたいと願ふ者である。併し尙、現在の年少者の自分として、この理想の目的地への行進は、今「日暮れて道はし」の感甚だ深いものがある。



創作

蜘蛛の糸 (極樂の健陀多)

大久保 眞 順

糸が急に中途から切れたものですから、健陀多は闇の中にづん／＼落ちて行きました。でも下は例の血池ですから別段傷を負ひませんでした。四邊を見廻すに幾百幾千とも知れない罪人共が、物凄く光る池の中に浮きつ沈みつしてゐるぢやありませんか。健陀多はムカ腹立てゝなりました。するに罪人共は、すっかり恐れてしまひました。

お釋迦様は健陀多の利己的な心を見て淺ましく思ひ召されました。けれども慈悲圓滿なお釋迦様が、此の爲健陀多の救ひを抛けうたれる筈がありません。

再び勇氣を盛りかへして、健陀多は蜘蛛の糸を上りはじめました。凡そ一時間——地獄、極樂は時間を絶してゐますから、量的に言ふ事は不可能ですが、彼は婆娑の事を追想して一時間と思つたのでせう——も上つた時分、健陀多は上る手を休めて暗の中を見下しました。

するに、闇に光る血の池の中には例の罪人達が只健陀多の上つて行くのをみつめてゐるばかりで、誰一人として上らうとする者は有りません。一喝が斯く迄も無駄にならなかつた事を想ふに豪壯な微笑を禁ぜざるを得なかつた事は勿論です。健陀多

は、あの飛行家が幾萬幾十萬の觀衆を見下した刹那にこみ上げる或英雄的な、勝利感の様な心持ちになつたのです。そして下ではワアツワアツ／＼囀る聲が聞えて来る様な氣がしたのでございました。又上りはじめます。或法悦に近い喜びを持つて、づん／＼糸を手繰つて來ました。確か上りはじめてから一週間位になります。が、さうでせう、身體には少しの疲れも覺えないぢやありませんか。その後更に十日位は過ぎたでせう。或日の事、手繰る手をさめて考へました。(自分は何時になつたらあの地獄から逃れられるのだらうか……)でもいつかは必ず別の世界へ——あはよくば極樂に行かれるに違ひないさ考へ——宗教的信仰に近い信念は常に失ひませんでした。そして其の一手繰りにも、或潑刺さる信仰が充ちてゐました。健陀多は少しも懷疑せず、寧ろ上る事によつて報いられると言ふ「安心」を持つて上りつづけたのです。

健陀多が七寶池と言ふ極樂にある立派なお池にヒョッコリ頭をもち上げたのは、それから一年位後の事なのです。お池の中には車輪の様に大きい蓮が咲いてゐて、其の金色の蓮からはえも言はれないよい香が絶えず香つて來ます。池底には金沙が敷かれ、空からは微妙な天樂が常に耳に聞えます。四邊はすつかり、金、銀、瑠璃、頗梨、車渠、赤珠、馬腦で飾り立てられ、舍利、迦陵頻伽、共命等婆娑で名ばかり聞いてゐた鳥は青、黄、赤、白の蓮の上を戯れてゐます。

健陀多の出現は、單調な極樂の一日にこつて可成りの大事件でございました。彼は此の世界を見てそんなに狂喜した事でもうか。後でお釋迦様のお慈悲を知つた時にこんなにかお釋迦様のめづみを隨喜した事でせう。健陀多は一個の蓮臺を與へられました。極樂に行つた人々は永劫に其の蓮臺に坐る事になつてゐます。蓮臺を與へられて健陀多は沈ついた氣持で其處に坐り續けました。今は精神的な或は肉體的な慾望は更に起りませんでした。空腹を感じない事を彼は何よりも有難く思ひました。風さへ吹かない極樂は平和そのものでございます。

三年の間極樂には、蓮の花瓣一枚落ちませんでした。極樂に來てゐる人々は皆神妙に坐りつづけてゐます。一方健陀多は極樂に來たと言ふ昂奮は三年間に殆ど消えかゝつてしまひました。そろ／＼極樂生活に倦怠を感じ初めました。